

『リア王』における二人の姉妹と愛情分割について —エドモンドをめぐる確執の構造—

丹 羽 佐 紀 *

(2019 年 10 月 21 日 受理)

The Two Elderly Sisters in *King Lear* and the Division of Love: Their Adulterous Relationship with Edmund

NIWA Saki

Abstract

This paper focuses on the relationship between Lear's division of his kingdom in Act 1, Scene 1, and its incompatibility with the division of love, which Lear requests his three daughters — Goneril, Regan, and Cordelia — to prove. In particular, I analyse several scenes in which Lear's two elderly daughters, who are married, struggle to win the affection of Gloucester's illegitimate son Edmund by outwitting each other, and clarify how their feud is closely linked to the concept of division of feelings and kingdom in this play. One of the main sources of the play, *The True Chronicle Historie of King Leir and His Three Daughters* (1605), does not contain any stories about Edmund. The subplot of the adulterous relationship between two sisters and Edmund in *King Lear* is Shakespeare's creation, and their lack of affection towards their father and the desire to win the adulterous relationship have a great impact on the other scenes, which, consequently, creates a unique atmosphere in the whole play.

Keywords: division, love, parents, sisters, kingdom

* 鹿児島大学 法文教育学域 教育学系 准教授

はじめに

シェイクスピアの『リア王』1幕1場において、年老いたリアが行なう娘たちへの愛情テスト、コーディーリアのそっけない言葉に対するリアの激昂、また姉妹たちの魂胆が見破れなかったリアがその後彼女たちから受けるひどい仕打ちといった主筋は、その材源となる民間伝説や Geoffrey of Monmouth の *Historia Regum Britanniae* (c. 1135)、及び本作品に先立ち 1590 年代に薔薇座^{ローズ}で上演されたとされる作者不詳の『リア王年代記』(*The True Chronicle Historie of King Leir and His Three Daughters*) のあらすじを概ね踏襲している。¹ リアは、自分への愛情を最上の言葉で表現することを娘たちに要求し、その見返りとして、彼が治めていた領土を娘たちの配偶者に譲渡すると宣言する。² だが彼の期待は、最も可愛がっていた愛娘コーディーリアの ‘Nothing’ (1.1.89) という言葉によって裏切られる。シェイクスピアの作品が先行作品と大きく異なるのは、劇の後半から結末に至る場面展開と、道化の登場、そして廷臣グロスターの非嫡子エドモンドをめぐるゴネリルとリーガンの不貞愛と確執というサブプロットが組み入れられていることである。『リア王年代記』では、コーデラの嫁ぎ先であるフランス王の軍隊が最後に勝利し、リアの王位復帰という結末を迎えるのに対し、シェイクスピアの『リア王』は二人の不条理な死をもって終わる。もともとの作品には登場しない道化は、『リア王』の劇中で常に老王に寄り添い、周囲に独特の雰囲気漂わせる。これらの要素は、いずれもシェイクスピア独自の劇世界を展開させるのに大きく寄与している。

本論では、シェイクスピアのオリジナルになるもう一つの重要なサブプロットである、エドモンドの愛情獲得をめぐるゴネリルとリーガンの確執に注目し、二人の恋愛が、主筋展開の発端となる親子の愛情と領土の分割と密接に関わっていることを明らかにする。1幕1場において、親孝行の度合いに応じて領土を娘たちの配偶者にそれぞれ分け与えるというリアの方針は、愛情という目に見えない人間的感情を、領土という可視的な分量の価値に置き換えようとする試みであり、それはこの劇に通底するテーマとなっている。³ 既婚者でありながらエドモンドと結ばれたいと願うゴネリルとリーガンにとって、父親から譲渡される領土は、もし思惑どおりに不貞愛が成就すれば、その幸福の完全性を可視化させる象徴となるはずであった。しかし互いに恋仇を出し抜いて不貞愛を成就させる賭けに失敗した二人は、結果的に破滅へと向かい、領土獲得も愛情獲得も水の泡と消える。すなわち、ここで愛情の喪失と領土の喪失は連動しているのである。本論では特に、二人のいわば賭けの誤算とも言うべき原因として、皮肉にも二人が本気でエドモンドを愛してしまったことに着目する。ゴネリルとリーガンは、宮廷での嗜みとしてリアへの愛情をうわべだけの言葉で取り繕いつつ、実際には父親を見捨てることをためらわないう一方、エドモンドには本気で惹かれたのであり、それは家父長制の下で淑女然と父親の言いつけに従い公爵に嫁いだ二人にとって、抑制不可能な未知の状況であった。この点において、劇の最後における彼女たちの ‘Nothing’ へと向かう破滅は、はからずも彼女たちが本気で愛情を抱く人物であったことを浮き彫りにする。道徳的教訓が色濃く反映され、勧善懲悪の様相を呈する『リア王年代記』の筋書きでは、親不孝の冷酷さを体現する悪の表象のように描かれるゴネリルとレイガンは、シェイクスピアが生み出した新たなサブプロットにより、感情的に弱みも持つ、より人間的な人物として描かれているのである。

愛情と領土の分割 ―愛されなかった娘たち―

『リア王』1 幕 1 場において、リアに対するゴネリルとリーガンの態度と、コーディーリアの振る舞いの対照性は、この親子姉妹の関係について様々な情報を観客に提供している。リアは、自分たちの持てる愛情の全てを父親に捧げると公言して憚らないゴネリルとリーガンの態度に手放して喜ぶ。彼は、彼女たちの親孝行の度合いに応じて、領土という可視的な報酬を与えようとする。互いに求めているものをそれぞれ手に入れるという点で、この親子間のやりとりは一種の取引を意味しているが、この取引自体が、愛情に美辞麗句の保証を付けなければ成り立たない親子関係を露呈している。同時に、愛情という不可視的で移ろいやすい人間の感情を、目に見える固定化された領土と同じ価値基準に置いて引き換えるという点で、この取引がリアにとって不利であることは観客の目に明らかである。采配を振るうとするリア自身がそのことに気がつかない状況は、この場面のグロテスクさをより一層際立たせている。

親子間の愛情が数値的な視点に立って取引されることの矛盾を、はからずも父親の愛情テストに対するコーディーリアの受け答えが示唆している。リアの問いに対し、自分が父親に分量で示せる愛情は「何もない」(‘Nothing’(1.1.89)) と答えるコーディーリアは、続けて「お姉様たちは夫がありながら、なぜ愛のすべてをお父様に捧げると言われるのでしょうか？」(‘Why have my sisters husbands, if they say / They love you all?’(1.1.99-100)) と、父親と姉たちのやり取りへ疑問を投げかける。⁴ 彼女の論理によれば、言葉が愛情の量を証明できるのであれば、既に夫がいる姉たちの愛情は父親ではなく夫への言葉として 100 パーセント分割されなくてはならず、父親への愛情を 100 パーセントと主張する姉たちの台詞はそもそも嘘である。このようなコーディーリアの論理は、初期近代イングランドにおける女性、とりわけ妻の貞節に関する一般的概念と一致している。例えば 1598 年の版になる Henry Smith というピューリタン牧師の説教では、婚姻関係を結ぶ男女への提言として、妻が徹底して夫に従順であることの大切さが説かれている。

With whom should the wife rejoice rather than with her husband? Or with whom should she mourn willingier than with her own flesh? . . . Besides a yoke-fellow she is called a *helper*, to help him in his business, to help him in his labours, to help him in his troubles, to help him in his sickness, like a woman physician, sometime with her strength, sometime with her counsel. . . . Besides a helper she is called a *comforter* too . . . wives must be the rejoicing of their husbands. . . . (82-83)

この他、1622 年に出版され、当時広く読まれた William Gouge の花嫁の心得の書にも、創世記を根拠に妻が夫を支えることがいかに理にかなっているか唱えている。(89-94) このような観点に立てば、ゴネリルとリーガンは自分たちの食欲を満たすために父親のリアを欺き、100 パーセントの愛情と偽って領土を獲得した親不孝な人物という解釈が成り立つ。しかし、一見すると不当に見えるこの取引は、ゴネリルとリーガンの側にのみ責められるべき非があると捉えるべきなのであろうか。

実は、リアの愛情も厳密には 3 人の娘たちに対して等分されてはいないことをここで確認しておきた

い。1 幕 1 場でコーディーリアの ‘Nothing’ という返答にショックを受けたリアは、「あれをいちばんかわいがり、あれのやさしい手に余生をゆだねるつもりでおった」(‘I loved her most, and thought to set my rest / On her kind nursery.’ (1.1.124-25)) と嘆く。またゴネリルとリーガンも、父親がコーディーリアをいちばん可愛がっていたことに言及し、彼の豹変ぶりをあきれた様子で話している。

Goneril: You see how full of changes his age is. The

Observation we have made of it hath not been little.

He always loved our sister most, and with what poor

judgement he hath now cast her off appears too grossly.

(1.1.290-93)

これらの台詞は、劇の最初の場面で娘たちの愛情テストをしたリア自身が、父親としての愛情を等分できていないこと、そしてゴネリルとリーガンはそれをあらかじめ知っていたことを明らかにしている。つまり、もし彼女たちの愛情表現とコーディーリアのそれが同程度であれば、それと引き換えに譲渡される領土は、父親に最も可愛がられているコーディーリアにとってより有利なものとなったであろう状況を観客に推測させる。位高き王の娘としてそれぞれ自分たちにふさわしい身分の相手と結婚したことになるゴネリルとリーガンにとって、家父長制のもと父親の期待に応えたにもかかわらず、リアの愛情がコーディーリアにいちばん注がれるとなれば、その後の二人の父親に対する邪険な振る舞いは、親不孝というよりむしろ愛情を等しく分け与えなかった父親への復讐と捉えることも可能である。⁵ ちなみにシェイクスピアの『リア王』では、ゴネリルとリーガンは既に結婚しており、それぞれの夫はオールバニー公爵とコーンウォール公爵という設定になっているが、先行作品の『リア王年代記』では、三人の娘はいずれもまだ結婚前で、譲渡する領土も『リア王』のようにリアの一方向的な宣言によって振り分けられるのではなく、それぞれゴネリルとレイガンの求婚者であるコーンウォール王とキャンブリア王が、くじを引いて決めることになっている。

Leir: What resteth then, but that we consummate

The celebration of these nuptiall Rites?

My Kingdome I do equally devide.

Princes, draw lots, and take your chaunce as falles.

[Then they draw lots.]

These I resigne as freely unto you,

As earst by true succession they were mine.

(*The True Chronicle Historie of King Leir*; 547-52. Bullough, 350.)

言い換えれば、『リア王年代記』では三人の娘が置かれた立場は条件的に平等で、領土の分割も愛情の度合いに関係なく、くじという「運」で決められる。それだけに、シェイクスピアの『リア王』ではいかに愛情の度合いの不均衡が前面に出され、それがあらずじに大きく影響を与えているかがよくわかる。そして前述でコーディーリアが主張した愛情の割合の論理で言えば、父親から等しい愛情の分け前をもらえなかったゴネリルとリーガンは、自らの愛情を返す相手として、皮肉にもコーディーリアが説くところの正当な夫たちではなく、家臣の非嫡子であるエドモンドを選んだのである。

家父長制への抵抗 ―三人姉妹の関係―

1 幕 1 場におけるコーディーリアの ‘Nothing’ という台詞は、自分の愛情の量を示すことのできる言葉は「何もない」ことを意味すると同時に、ゴネリルとリーガンの言葉が「何も含んでいない」ことも観客に明示する。コーディーリアは、二人の姉妹たちが美辞麗句で唱える父親への愛情は、その言葉のどこにも実態は含んでおらず、中身が空虚なことを示唆している。それに彼女たちにしてみれば、領土という目に見える財産を手に入れた以上、もはや言葉を愛情と結びつける必要はない。しかし言葉の形骸化を彼女たちが置かれた立場という別の視点から捉え直すと、それが単に二人の冷やかさを表すだけではないという状況も見えてくる。

アーデン版の編者 Foakes は、1982 年の Adrian Noble の演出になる RSC の『リア王』の最初の場面において、ゴネリルとリーガンが、宮廷という場にふさわしい厳かな態度で礼儀にかなった儀式的な言葉をリアにかける演出をしている例を挙げ、彼女たちの美辞麗句が必ずしも不自然とはいえない解釈の可能性を紹介している。この演出においては、彼女たちの公の場になかった振る舞いと、大勢の前で父親に恥をかかせてしまうコーディーリアの未熟さが対比されているとされる。(37) 宮廷儀式的作法という観点から捉えれば、父親から愛情をさほど受けていなくても公の場で王である父親に敬意を表するゴネリルとリーガンの、抑圧された側面も垣間見えてくる。そこには、領土獲得のために美辞麗句を連ねることが必然的に求められる、家父長制下における娘としての義務という背景が読み取れる。

結婚において意思決定の余地を与えられなかったゴネリルとリーガンが、その代償として父親に領土を求めるのであれば、その手段として宮廷作法にかなった美辞麗句を連ねることは、身分ある彼女たちが取り得る最良の方法であったと言える。そして、大勢の宮廷人が居並ぶ場でコーディーリアが父親の面子をつぶすという行為は、コーディーリア自身のあどけなさを象徴すると同時に、二人の姉妹たちが置かれた立場を際立たせる役割も果たす。さらに『リア王』では、1 幕 1 場のコーディーリアの台詞から、三姉妹が決して互いに仲の良い関係にはなかったことも明らかである。彼女は最初から、姉たちへの不信任感を露わにしている。

Cordelia: I know you what you are,
And like a sister am most loath to call
Your faults as they are named. (1.1.271-73)

Cordelia: Time shall unfold what plighted cunning hides,
Who covert faults at last with shame derides. (1.1.282-83)

このような三人の関係は、他ならぬ血のつながった父親の愛情分割という行為によって、決定的に修復不可能な状態に陥る。

家父長制への抵抗 ―二人の恋愛と夫たち―

以上見てきたように、リアによる娘たちへの愛情分割と領土分割は、ゴネリルとリーガンが政治的な策略をめぐる上で重要な起点となっている。しかし、シェイクスピアの『リア王』では、二人は政治的駆け引きの渦中に身を置くだけの人物としては描かれていない。彼女たちの、宮廷作法にかなった美辞麗句が抑圧の裏返しであるとすれば、その後の二人の、エドモンドをめぐる確執ぶりは、二人が恋焦がれる者への感情を抑えきれない面を持つ人物であることを強く印象づける。彼女たちのこのような感情の激しさは、1 幕 1 場で、宮廷作法の礼儀が欲望に勝てなかった例としてグロスターが語る自らの体験によって、観客に既に暗示されている。劇の冒頭でグロスターは、エドモンドの誕生について、「あやまち」(‘a fault’ (1.1.15)) という言葉を用いながらも、快楽に逆らえなかったことをケント伯に打ち明けている。

Gloucester: Sir, this young fellow's mother could;
Whereupon she grew round-wombed, and had, indeed,
sir, a son for her cradle ere she had a husband for her
bed. Do you smell a fault? (1.1.12-15)

...

Though this knave came something saucily to the world
before he was sent for, yet was his mother fair, there was
good sport at his making, and the whoreson must be
acknowledged. (1.1.20-23)

ゴネリルとリーガンがその愛情獲得をめぐる激しく争うエドモンドの出生についてのグロスターの語りは、彼が過去に抱いた恋愛感情の説明であると同時に、その結果として生まれた子供へのゴネリルとリーガンの恋愛感情の重なりを予言する機能も果たしている。思わず「この世に飛び出して」きたエドモンドのことを、まんざらでもないという口調で語るグロスターの台詞が劇の冒頭に導入されることにより、愛のない結婚をしたゴネリルとリーガンが彼に惹きつけられる理由も観客には想像できるのである。アーデン版の編者 Forkes は、グロスターが描写するエドモンドの「活力、気質、沈着冷静さはたちまち観客の注意を引きつける」(‘his energy, humour and self-command at once engages our interest’) と述べている。(44)

一方で、ゴネリルとリーガンが互いに相手を陥れることを躊躇しないほどに激しい恋愛感情を抱くエドモンドとのサブプロットは、彼女たちが、正当な結婚をした自分たちの夫に何ら魅力を感じていないことを浮き彫りにする。ゴネリルとリーガンは、エドモンドに対しては自分たちの恋愛感情を取り繕わない。二人は本人に、何とか一緒にになりたいという思いを必死でアピールする。エドモンドは王位継承の正当な血筋ではなく、結婚相手としては彼女たちにとって何の得になるわけでもない。しかし、だからこそ一層、二人がそのような状況にもかかわらず彼を慕う感情は、二人の姉妹がリアへの親不孝とは異なる面を見せる人物であることを、観客に明らかにするのである。

エドモンドの改心

二人の女性に慕われるエドモンドについては、どのような人物像が浮かび上がって来るであろうか。エドモンドは、1幕2場で自分の出生について語り、自分がこの世に生を受けたなりゆきを自然の本能の営みとして正当化しようとするが、彼がその後にとる行動は逆説的に、彼が自らの出生にコンプレックスを持っていることを観客に気づかせる。彼は父親のグロスターを言葉巧みに操り、兄のエドガーが父親への謀反を企んでいると思い込ませる。これは自分が父親に信頼されていることを、自らに対して証明するための方策でもある。いわば父親の愛情テストをしているという点で、この場面は、1幕1場におけるリアの娘たちに対する愛情テストの伏線となっている。しかし出自ゆえに、宮廷でどれほど頑張ってもエドガーより上の地位に上がれないという現実、彼に父親ではなくゴネリルとリーガンの恋愛感情を利用する道を選ばせる。自分の存在価値はゴネリルとリーガンを振り向かせることで証明できる。しかしここでもまた、シェイクスピアが創り上げたのは、『オセロー』に登場するイアーゴのような嫉妬と復讐の権化ではなかった。

ゴネリルとリーガンが、フランス軍との勝ち戦をかなぐり捨ててまでも自分の愛を勝ち取ろうと熾烈に争い、結果的に双方とも自滅したと知った時、エドモンドは次のように「エドモンドはやはり愛されていたのだ、おれのために姉は妹を毒殺し、そのあとで自殺したのだ」と言い、他の登場人物たちに真実を語る。

Edmund: Yet Edmund was beloved:

The one the other poisoned for my sake,

And after slew herself.⁶

(5.3.237-39)

この台詞は、自分が二人の女性に理屈抜きに愛されていたと知って初めて、彼が取り返しのつかないことをしたと他の人物たちに告げる決意をしたことを示している。

おわりに

勸善懲惡の劇であればかき消されてしまったであろう彼らの愛情をめぐる諍いは、劇の最後の場面でリアやコーディリアも死を遂げ、愛情分割も領土分割も‘Nothing’に帰するというあらすじ設定によ

り、サブプロットでありながらゴネリル、リーガン、エドマンドの人物像に多義性を与える効果をもたらしている。『リア王年代記』ではリアとコーデラは生き残り、17世紀以降のネイハム・テイトに代表される改作版でもリアの物語はハッピーエンドが主流となるが、シェイクスピアの『リア王』においては、勸善懲惡の道德教訓的な要素が影を潜め、一筋縄ではいかない親子の感情や恋愛感情が複雑に絡み合う複数のプロットが組み込まれているからこそ、それぞれの登場人物がより生き生きとした息吹を与えられ、観る者の心を打つのである。

註)

- 1 『リア王』及びその先行作品である『リア王年代記』の上演時期については諸説あるが、正確な記録は残っていないため、いずれも推測の域を出ない。ただし、両作品が関連性を持って書かれたことは明らかである。
- 2 シェイクスピアの『リア王』では、リアは娘たちへの領土譲渡についていきなり話し始めるが、『リア王年代記』では、彼は劇の冒頭で最愛の妻を亡くして途方に暮れている現状を家臣のスキヤリジャーや他の貴族に打ち明け、娘たちに今後どのように対処してやるのが最善であるか彼らに相談している。ただし、周りの人物が慎重に事を運ぶよう忠告しているにもかかわらず、思いつきで愛情テストを行なう点は同じである。
- 3 『リア王年代記』では、領土の分割譲渡はゴネリルとレイガンの夫となるコーンウォール王とキャンブリア王が、くじを引いて決める。重要な場面でくじを引くという概念の歴史は古く、Ashton は旧約聖書の使徒行伝 1 章 26 節における、くじ引きで弟子を決める場面を例に挙げている。(4)
- 4 以下『リア王』の原文引用及び引用行数は、アーデン版に従う。日本語訳は小田島雄志訳(白水社)を使用した。
- 5 ケンブリッジ版の編者 Halio は、ゴネリルとリーガンの我を通そうとする性格は、まさしくリアの娘であることの証拠であると述べている。('Gonerill and Regan suffer later for their lusts, which by then include a deadly competition for Edmond. In this respect, in so far as they mean to enforce their wills in order to realize their purposes and desires without regard for the interests and claims of others, Gonerill and Regan show themselves to be truly Lear's daughters.')(20)
- 6 フォリオ版でのエドマンドの名前は Edmond となっており、ケンブリッジ版テキストではこちらを採用している。本論の引用にはアーデン版テキストで用いられている Edmund の綴りに従った。

Bibliography

- Ashton, John. *The History of Gambling in England*. London: Duckworth & Co., 1898. Rpt. Tokyo: Athena Press, 2006.
- Aughterson, Kate, ed. *Renaissance Woman: Constructions of Femininity in England*. London: Routledge, 1995.
- Bullough, Geoffrey, ed. *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*. Vol. 7. London: Routledge and Kegan Paul, 1973.
- Coast, David. *News and Rumour in Jacobean England: Information, Court Politics and Diplomacy, 1618-25*. Manchester: Manchester University Press, 2014.
- Curran, Kevin. *Marriage, Performance, and Politics at the Jacobean Court*. Farnham: Ashgate, 2009.
- Dahl, Mary Karen. *Political Violence in Drama: Classical Models, Contemporary Variations*. Michigan: UMI Research Press, 1987.

- Foakes, R. A. Introduction. *King Lear*. By William Shakespeare. Ed. R. A. Foakes. London: Bloomsbury, 1997. 1-151.
- Gouge, William. 'Of Domestic Duties.' 1622. *Renaissance Woman: Constructions of Femininity in England*. Ed. Kate Aughterson. London: Routledge, 1995. 89-95.
- Halio, Jay L. Introduction. *The Tragedy of King Lear*. By William Shakespeare. Cambridge: CUP, 1992. 1-93.
- Marshall, Peter, and Alec Ryrie, eds. *The Beginnings of English Protestantism*. Cambridge: CUP, 2002.
- Shakespeare, William. *King Lear*. Ed. R. A. Foakes. London: Bloomsbury, 1997.
- , *The Tragedy of King Lear*. Ed. L. Halio. Cambridge: CUP, 1992.
- Smith, Henry. *A Preparative to Marriage*. 1591. *Renaissance Woman: Constructions of Femininity in England*. Ed. Kate Aughterson. London: Routledge, 1995. 82-83.
- Traub, Valerie, ed. *The Oxford Handbook of Shakespeare and Embodiment*. Oxford: OUP, 2016.
- Woodbridge, Linda, ed. *Money and the Age of Shakespeare: Essays in New Economic Criticism*. New York: Palgrave Macmillan, 2003.
- シェイクスピア、ウィリアム 『リア王』（小田島雄志訳） 白水社、1983 年